

財貨としての「儀礼的交換用石斧」

— ニューギニア島ダニ族の Je Stones について —

栗島 義明

はじめに

埼玉県鶴ヶ島市に日本屈指のニューギニア民族資料のコレクションが収蔵されていることを知る人は、そもそも博物館関係者の間でも極めて少数に留まっていたに違いない。欧米諸国の美術関係者の間では、ニューギニアを含めたオセアニア民族美術のその表現力、斬新性、多様性などは以前より極めて高く評価されているが、日本ではまとまった資料展示が殆ど無いことからもその評価は低いと言わざるを得ない。恐らく多くの人がオセアニア民族資料の存在については、大阪にある国立民族学博物館以外にそれを思い浮かべることは無いに違いないが、実は首都圏及び周辺地域にも極めて学術的価値の高いニューギニアコレクションが展示、収蔵されていたのであった。新潟県塩沢町の町立今泉博物館と埼玉県鶴ヶ島市の資料である。資料紹介に先立って何故、希有なニューギニアの民族資料が鶴ヶ島市に収蔵されることになったか、その経緯について触れておこう。

1995年と翌96年にかけて埼玉県鶴ヶ島市は、故今泉隆平氏によって収集されたパプアニューギニアを中心としたオセアニア地域の膨大な民族資料の寄贈を受ける。その数は1,725点にも及んでいた。新潟県塩沢町出身の今泉氏は、公職（石内村長）を退かれた後に手に入れた土地が高度成長期の中で高騰し、たちまちのうちに大資産家になった人物である。昭和30年代の首都圏域では決して珍しい話ではなかったと考えられるが、今泉氏の場合は有り余る資産を国内外の美術品収集に惜しげもなく注ぎ込んでいった点で他と大きな違いがある⁽¹⁾。古美術品や絵画に加えて今泉氏が目をつけたのがパプアニューギニアを中心とした民族美術品であり、東京神田にあった「パシフィックアーツ」という民族造形品の輸入会社（大橋昭夫氏）を介して積極的な資料収集を進められた。お二方の運命的とも言える出会いはあるで小説の一節を読む感があるが、何よりも「故郷のために博物館を作りたい」という今泉氏の夢と、身の危険と仕事としてのリスクを承知しながらも、民族資料の収集を「天職と思って仕事」をしていたという大橋氏との思いの交叉無くしては、この世界的にも貴重な当該資料の収集は成し得なかつたに違いない。

そもそも報道カメラマンであった大橋氏は、独立後のパプアニューギニア政府の要請もあり民族（造形）美術品の輸入取り扱い業者として転職されたという変わった経歴を持つ人物であった。氏はニューギニアのセピック地域を中心として資料収集活動を行い、5～6年かけて約3,000点の資料を収集した。これが今泉氏の目に止まった資料であったが、それらは系統だったものではなく博物館資料とするには見劣りのするものであった。そこで二人は、相談のうえ現地での収集に加えて欧米の市場にある資料やコレクターの持つものをターゲットに、以後5年に及ぶ資料の補充・充実が計られてゆくこととなった。この間高橋氏は、オーストラリアの専門のコレクターに加えて海外の有名オークションにも積極的に参加し、氏の言葉を借りれば「第三国（第三世界）の美術市場からの収集活動は、今泉さんという後ろ盾もあって、まさに飛ぶ鳥を落とす勢い……世界中の市場にあったものの中で、これは必要だと思うものはほとんど手に入れた」という。特にこうした個人コレクションやオークションがらみの資料は、パプアニューギニア独立以前に海外流出した貴重な資料が多く含まれてい

た点は注目しておかなくてはならない。今泉氏の資金力と高橋氏の審美眼・鑑定力がまさに一体となり結実した資料がこの5年間に収集されたのである。初年度から2年次までの資料が塩沢町に収蔵されたが、それに続く3～5年間に収集された最も貴重な資料群の落ち着き先が今泉氏の死後、長らく決まらずにいた。こうした状況を憂いた鶴ヶ島市在住の今泉氏の実弟が、それら資料の寄贈を市側に申し出したことにより、この全国的に珍しい、否、世界的にも貴重なパプアニューギニアを中心とした民族美術品が鶴ヶ島市に所蔵されることになったのである⁽²⁾。

鶴ヶ島市に所蔵されている資料を見学したのは、確か2006年の秋であったと思う。民族造形美術に関する知識が皆無な著者でも、各種通過儀礼に用いられた仮面や精霊が表現された彫像、戦闘時に用いられた盾の他、各種生活用具（楽器、石臼、腰掛け、枕、絵画、土器、石器、装身具）などに強い感動を覚えたことを鮮明に思い出す。特に見学の目的であった「財貨」のフルセットを眼にした時の驚きと感動は久々に味わう類のものであった。何とかこれを図化して概要紹介だけでもしたいとの思いがあったが、生来より怠慢であるが故に延び延びとなってしまっていた。そうした中で新聞報道にて当該資料が鶴ヶ島市から天理大学へと移管されるとの記事を目にすると、市教の齊藤氏と天理大の吉田氏のご配慮により移管間際の状況のなか、何とか「財貨」の撮影と図化が叶った。先ずもって両氏に感謝申し上げたい。

ダニ族の生活と社会

ここで紹介する資料は「儀礼的交換用石のセット」として『ニューギニア 神と精霊のかたち』に掲載されているものである。資料は本多勝一氏の名著『ニューギニア高地人』（朝日新聞社1981年）でつとに有名であるダニ族が使用していたもので、石器自体もさることながらその装飾や社会的な価値・機能など、ニューギニア高地人の生活にとって極めて貴重なものである。石器並びに財貨としての特徴について触れる前に、ニューギニアのダニ族についての概略を紹介しておこう。

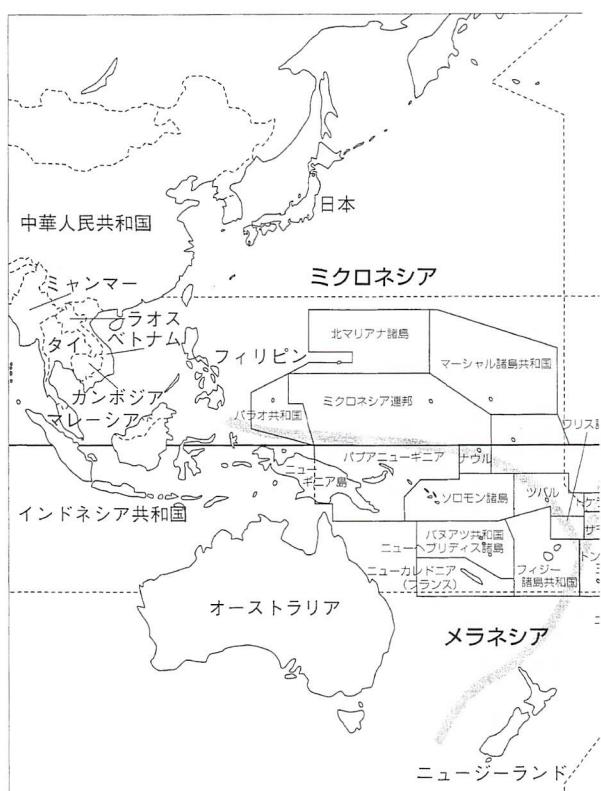
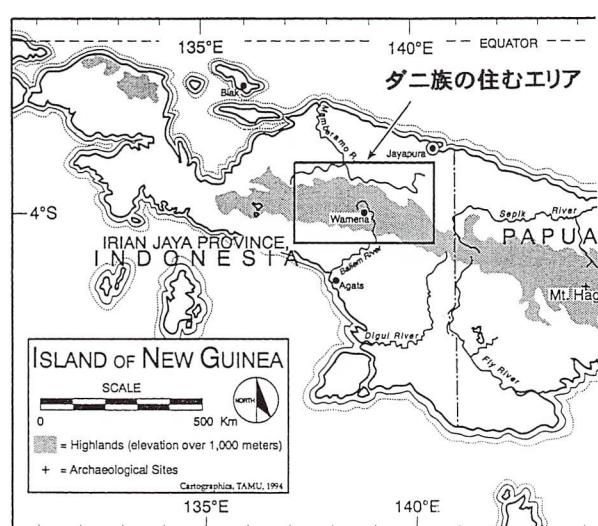
そもそもダニ族とは世界第二の島であるニューギニア島の西半分、インドネシア領の中央高原のイリアンジャン州に住む三つの部族を総称したものである。1981年に実施された調査では総人口は約22万人であり、約30もの氏族に分かれていると言われているが、大きくはワナメを中心としたバリエム川流域に居住する人口7万5千人のグランド・バレー・ダニ族（Grand Valley Dani）、東方山岳地帯に住む人口約3万5千人のヤリ族（Yali）、イラガを中心とした山岳地帯に住む人口約10万人のウェスタン・ダニ族（Western Dani）に分けることができる。これらの部族がダニ族と総称される理由は、最初にこの地を訪れた白人がグランド・バレー・ダニ族の姓を民族名と解釈してしまったことに原因があるらしい。各部族がその居住環境を違えるように各部族が使用する言語にも方言が存在するが、生業や生活習俗での大きな違いを見出すことはできない⁽³⁾。我々が写真で目にしたり、文献で知るダニ族のイメージはグランド・バレー・ダニ族のそれである場合が多い。

グランド・バレー・ダニ族はニューギニア島の中央部、3,000m級の山々を擁するジャヤウイジャヤ山脈に囲まれた長さ約60km、幅15kmほどの盆地に住んでおり、標高約1,600mの高地に在るこの場所は特に主食であるサツマイモを始めとした根菜類の栽培に適している。何よりもこの寒暖差の大きい高地にはマラリア蚊がおらず、この為にダニ族の棲むこの盆地は熱帯雨林が広がる低地部などに比べ驚く程に人口密度が高いのである⁽⁴⁾。

ダニ族は焼畑によるサツマイモ栽培を生業の中心に狩猟や漁労・採集活動も行う。家畜としては

豚を飼育しており、この豚は婚礼・葬式等々の様々な儀式で人々に供されるばかりでなく、婚姻や交易用の結納・支払いの為の財産としても利用される、ダニ族にとって極めて重要なものである。村には男性が住む丸い形の家と女性や子供達が一緒に暮らす長方形の長屋が存在しており、男女ばかりか夫婦さえも別々の棟に分かれて生活している。特に男性は村にある「男の家」で共同生活を送ることが通例で、これはダニ族の社会が父系社会であることと一夫多妻の習俗が大きく関わっていると考えられている。

ダニ族社会では男女が別れて暮らしていることにも関連して、男女間の分業が明確となっている。男性の主な仕事は道具を作ることと戦争にあった。金属器を知らないダニ族にあって、道具といえば竹製ナイフ（豚などの解体に使用）、槍、弓・弓矢（戦争などに使用）、そして石斧ぐらいである。一方の女性は農耕と豚の飼育を主な仕事としている。また交易用の塩の精製も女性に負わされた重要な仕事の一つであった⁽⁵⁾。一見すると原始的な生活を営むダニ族だが、彼らの畑は立派な灌漑施設を持ち整然と畠が並んでおり、手入れが行き届いた畑は垣根でその周囲を囲まれている。畑では主食であるサツマイモを始めとしてタロイモ、サトウキビ、トウモロコシ、ヒヨウタンなどが栽培されている。女性達の仕事は耕作、種まき、栽培、収穫などの畑仕事だけでなく、豚の飼育という重要な役割が存在する。豚はダニ族にとっては単なる家畜ではなく貴重な財産であったことから、どれだけ多くの豚を所有しているか、豚は財産でありその数こそが男性威信の高低を示すメルクマールともなっていた。この為に妻達は我が子と共に豚を長屋で同居させ、自らの乳を与えて大切に育てているのである。経済力のある村の実力者は沢山の妻を持ち、従って生活が豊かであることから沢山の豚を所有することが可能となるのである。



第1図 ニューギニア島の位置
(鶴ヶ島市版 2005, Hampton 1999より)

さて、ダニ族の棲む中部高地にある盆地はマラリア蚊がおらず、土地が肥沃なことから原始的な農耕社会としては驚く程に人口密度が高い⁽⁶⁾。為に農地や豚、女性などを巡って村落間でのいざこざが絶えなかった。その結果として男達は戦闘的とならざるを得ず、その主な仕事が部族間の縛張り争いとなったのである。男性が血縁関係にあるもの同士で同じ家に住むのも、戦闘に備えての同胞意識を高め維持することが目的として存在していたのであろう。嘗て土地や豚、女性を巡る村落間の戦闘で命を落とした者も多かったようで、手の指が第二関節から失われている女性が多いのは、病死に加えて村落間での戦闘により身内が失われるケースが多かったからである。ダニ族の女性は身内に不幸があった場合、喪に服すという意味で自分の指を切るという習慣が存在し、本多氏が滯在したウギンバラ村の成人女性では、平均3本の指が切られていたという。

ダニ族の社会は先に述べたように一夫多妻であり、男性は妻を何人持っているかということと豚を何頭所有しているかによって社会内での地位が決まる。そうした男性が身に付ける装飾品には、艶やかな鳥の羽で飾り立てたヘッドバンド、腕輪、鼻飾り、そして胸飾りなどがある。特に地位の高い男性がその富と力を誇示する装飾品が子安貝でできた幅広のネクタイ状の首飾りであり、この子安貝は内陸部に暮らすダニ族にとっては非常に価値の高い、物々交換に際して彼らが最も渴望するまさに宝物であった。為に子安貝を多数繋ぎあわせて作ったネクタイは、男性にとって彼の財力と勢力をこれ見よがしに示すまたとない威信財となり得たのである⁽⁷⁾。

男性達の主な仕事は戦闘とその準備にあると述べたが、例外的な仕事として彼らはヨカールという女性用の腰飾りを編み上げる。ダニ族の女性が身に付ける衣装としては、背中を隠す（腰回りと共に背中は人に見せるのが憚れる部位とされている）ノーケンと腰回りを隠すサリーとヨカールとがある。すだれ状の腰巻であるサリーは草で編まれたもので、これは彼女が未婚であることを示す。ヨカールは細い紐を何重にも巻いた腰飾りであり、男性が数ヶ月もの月日を費やして花嫁に送る結納品で、同時にこのヨカールを腰に巻いた女性は既婚であることを示している。

ヨカールは植物纖維を撚りあげて作った紐を芯として、その外側に木の皮やランの茎を巻いた組紐のようなもので、染色はされていないものの黃金色のランの茎は美しい文様を生み出している。一人分のヨカールを作るには大凡200mの長さの紐が必要とされ、材料の入手や製作には膨大な労力が必要とされる。仕上げるまでに少なくとも3ヶ月はかかると言われており、この一種の結納品であるヨカールを作ることは男性にとって人生最大の大仕事とされていた。

鶴ヶ島市所蔵の財貨

本例は鶴ヶ島市に収蔵されていた財貨数点のうち、最も保存状態がよくフルセットとして残っている、しかもその来歴が明確なものである。『ニューギニア 神と精霊の世界』P88-89に所収されているもので、市教委報告では「財貨」(RITUAL PROPERTY)と記入されている。

資料収集カードに記載されているデータによれば、収集者は今泉隆平氏であり現地での入手は1990年の2月に(株)パシフィックアーツ(大橋昭夫)、採集者はアメリカ人ディーラのトッド・バーリン(TODD BARLIN)。採集場所はインドネシア共和国のイリアンジャン州中央高地のクランド渓谷(GRAND VALLEY)、北バリム川(NORTH BALIM RIVER) サルガカ村(SALKAGU VILLAGE)で、ダニ族によって使用されたものと明記されている。このフルセットについては、簡潔ながら極めて要領を得た適切な解説が『ニューギニア 神と精霊のかたち』のなかに見られる。

少々、長くなるが以下に紹介しておこう。

「儀礼的交換用石のセット（ジェ・ストーン）は結婚式や葬式のときに交換される贈物であり、儀礼的交換用宝物である。

写真のジェ・ストーンは完全なフルセットで、網袋（ノッケン）に入れられ、ダビーという名の首長の家の奥に隠されていたもので、村人たちは普段は見ることも禁じられていた。このセットは、1990年2月、サルカグ村のクルルスという人の葬儀のときに『かたみの包み』として披露されたものである。使われている石は、「ダニ」の居住地から北西に150kmも離れたジェリム川で採られた長く平らな黒色の石で、石刀の形によく磨かれている。これらの石は交易によって手に入れたもので、ランの黄色い茎で作られたバンドを巻き、クスクスの毛皮などを飾り付けている。また、それぞれの石のバンドには、極彩色のオウムの羽毛をそっくり1羽ずつ差し込んである。セットをひとくくりにする帶にはコヤスガイ（財貨）が縫い付けられている」さて、本例の特徴は、

- 1) 薄く大型に仕上げられた石斧状の石器とそれに付帯する各種装飾品
- 2) 網の上に財貨3本が並べられ、その上にタカラ貝を縫い付けた帶（シェルバンド）が添えられるという披露時の状態

の二つにあると言えよう。著者の興味はあくまで石器を中心とした「財貨」そのものにあり、その機能や社会的意義の詳細について詳細に論じることは不可能である。ここでは著者の関心事のみ



写真1 「儀礼的交換用石斧」のフルセット（鶴ヶ島市教育委員会 2000）

に留めて紹介せざるを得ない点をまずは了承願いたい。また、本例については文献等では「Display-Exchange Stones」と紹介されている場合が多いが、その社会的機能や形態的な特徴を加味したうえ、ここでは「儀礼的交換用石斧」と仮称しておくことにしたい。石器の観察を通じても形態的には無論のこと、仕上げや刃部（相当箇所）の位置などを勘案しても本例は石刀ではなく、あくまで彼ら（ダニ族）の最も普遍的な生活資材である石斧をイメージして製作されている点は間違いないと考えられるからである。以下、フルセットとされる「儀礼的交換用石斧」のそれについて概観してみよう。

「儀礼的交換用石斧」の特徴（写真1）

No.1（第2図）は長さ50.1cm、幅12.8cm、厚さは最大で1.6cm、平均的には1cm程しかない非常に薄く仕上げられた、概形が略長方形の石斧である。重量は1,680g。器体中央部には黄褐色の組み紐を巻き付け、その上に若干下方にずらして植物を巻き付けた簾状のスカートを二重に巡らせており、更にその上には皮付きの毛皮片を複数結びつけた紐を巻いている⁽⁸⁾。これに加えて20cm×3cm、厚さ5mm程の舟形の板に、色鮮やかなオウムの羽根を貼り付けたものを石と紐の間に挟み込んでいる。このように属性の違う三種の紐で大型石斧の胴部を結わえ、オウム羽根を貼り込んだ「飾り板」とでも言うべき装飾品で飾り立てる点は、これから紹介する資料も含めた三点に共通する特徴である。

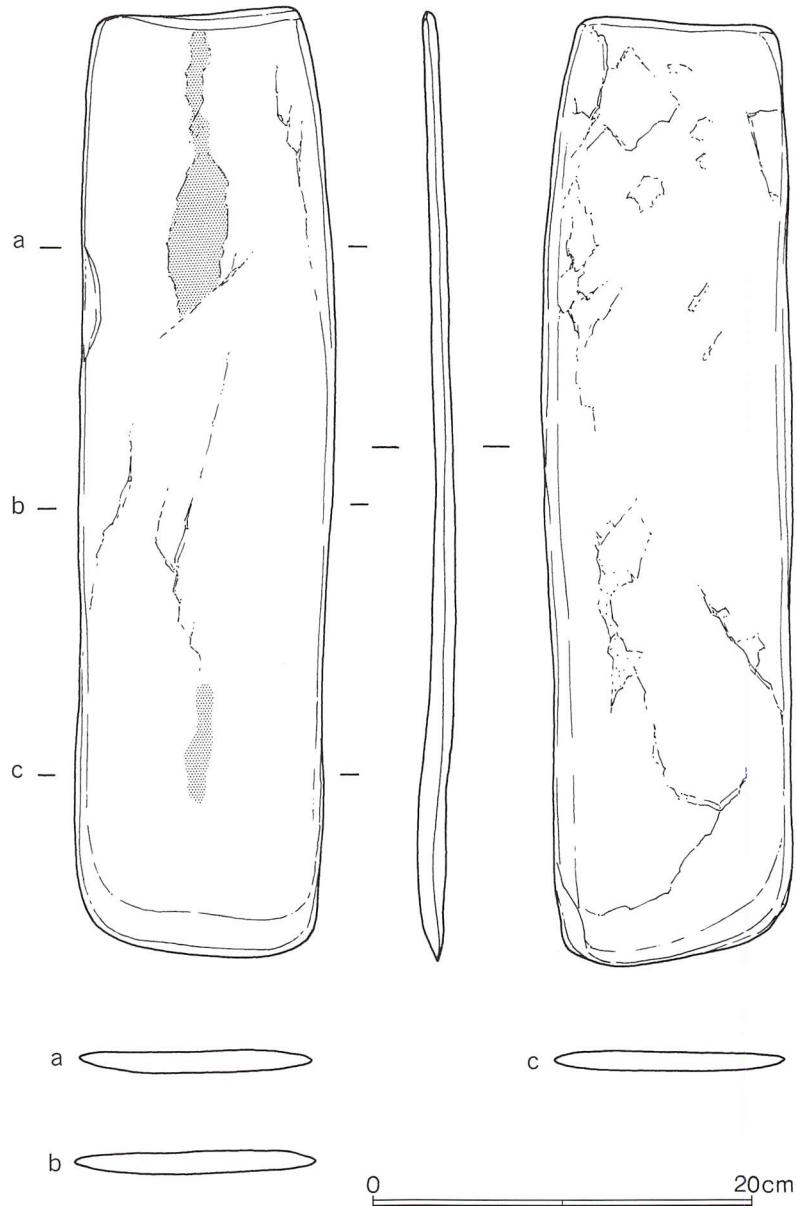
石斧はその形態から直接岩体から採取したか、大型の河川礫を板状に分割したかのいずれかであり、薄い板状素材の形状整形を行ったうえで全面を丁寧に磨き上げている。石材はその表面が暗緑色を呈する黒色粘板岩と考えられ、裏面には節理面で分割された痕跡を明瞭に留めている。片岩系の特徴を生かして節理面で割り込んだうえで周辺調整を行い、長方形の石斧形態に仕上げたのであろう。形態形成時の剝離痕跡は表裏面にそれぞれ1～2箇所の痕跡として残存し、片岩系石材に特徴的な階段状剝離痕を明瞭に留めている。何れにしても表裏面の研磨は入念になされている。頭部（上位）側の端部側縁には擦り切り痕跡が観察され、表裏側から擦り切りを行った後に分断した跡が残る。本例で注視される点は表面の中心軸部、特にその上半部位に赤褐色の彩色痕が残っている点である（網状スクリントーンで表示）。この部位は丁度、オウム羽根で飾った板の真下部分に相當している。

No.2（第3図）は長さ64.2cm、幅12.8cm、厚さ1.7cm、重量が2,645g。直線的な側縁と緩やかに湾曲した側縁を持つ石刀状の大型石斧で、三点の中でも特に入念にその全面が研磨されている。刃部相当部分は縦断面がV字状に研磨されており、本例がやはり石斧を基本形としていることを雄弁に物語っている。石材は同じく粘板岩と思われるが、黒色と暗緑色が縞状となって美しい。表面の一部に形態作出時の剝離痕跡を留めているが、他には全く見られないことから、とりわけ本例の研磨程度が高かったことを明示している。表面側の下半部には黄鉄鉱が観察される。本例にも器体上半部に黄褐色の組み紐が巻かれ、下方には植物を巻き付けたスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐が観察される。オウムの羽根を貼り込んだ飾り板がスカート状の紐の下位に差し込まれている。

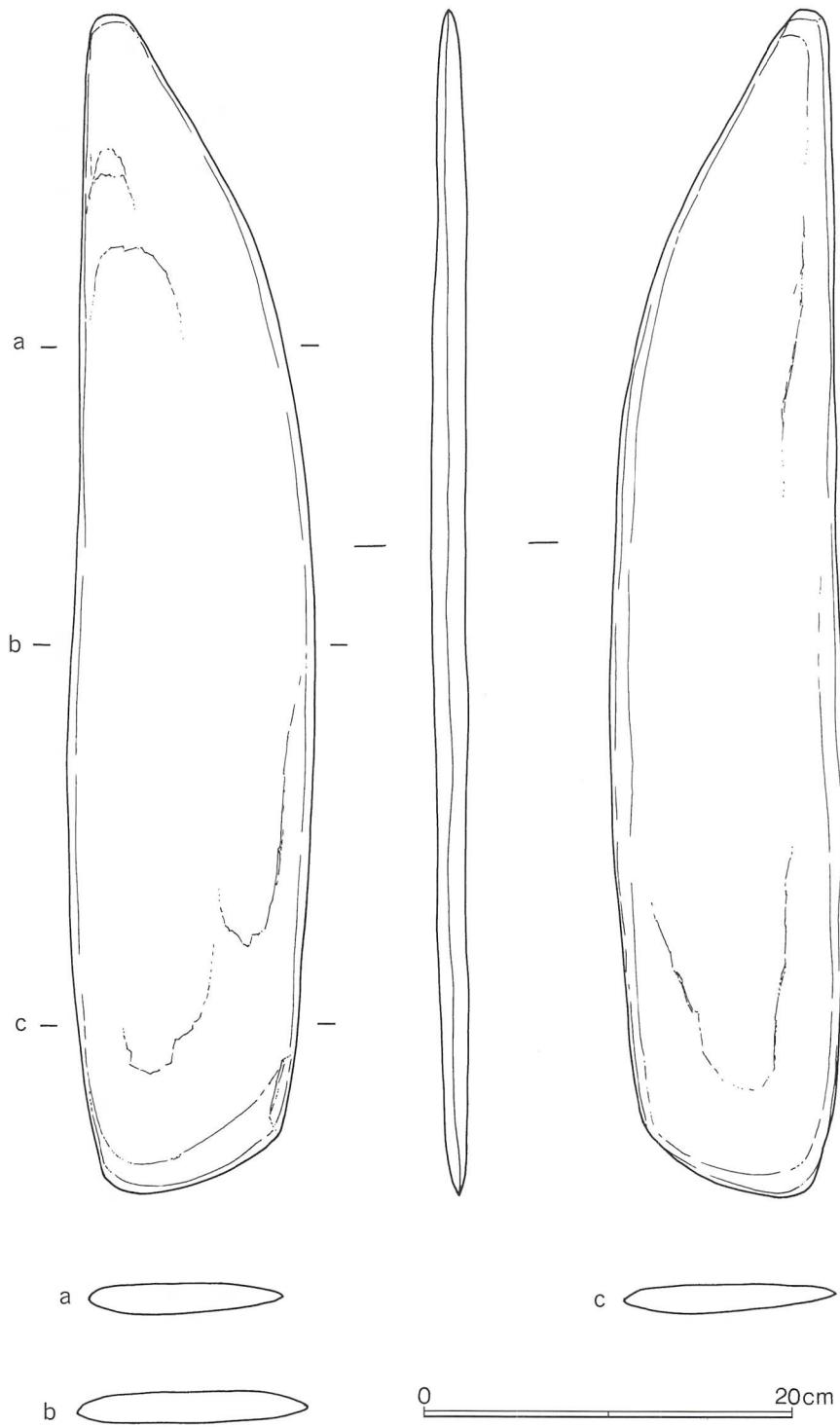
No.3（第4図）は長さ64.3cm、幅9.2cm、厚さ1.5cm、重量は1,780g。直線的な側縁と緩やかに湾曲した側縁を持つ石刀状の大型石斧であるが、No.2よりさらに石刀状に近似した形態を有する。本例の直線的側縁は擦り切り技法によって形成されたもので、側縁部には表裏両面側からV字状の溝が形成された痕跡を明瞭に留めている。最終的には薄くなつた箇所を折つたものと考えられ、その

やや突出した箇所（分断部分）を改めて研磨した跡が残っている（線状スクリントーンで表示）。また裏面側には長軸方向に併行した線状痕が数条観察されるが、これが擦り切り時のものか、研磨時のものかは不明である。刃部は研磨によって断面V字状の片刃に仕上げられており、やはり本例も石刀のようなものではなくて石斧であることを裏付けている。擦り切り後の整形・研磨は殆ど観察されず、元来、本例は大型石斧を擦り切り技法により半分割したものであった蓋然性が高い。

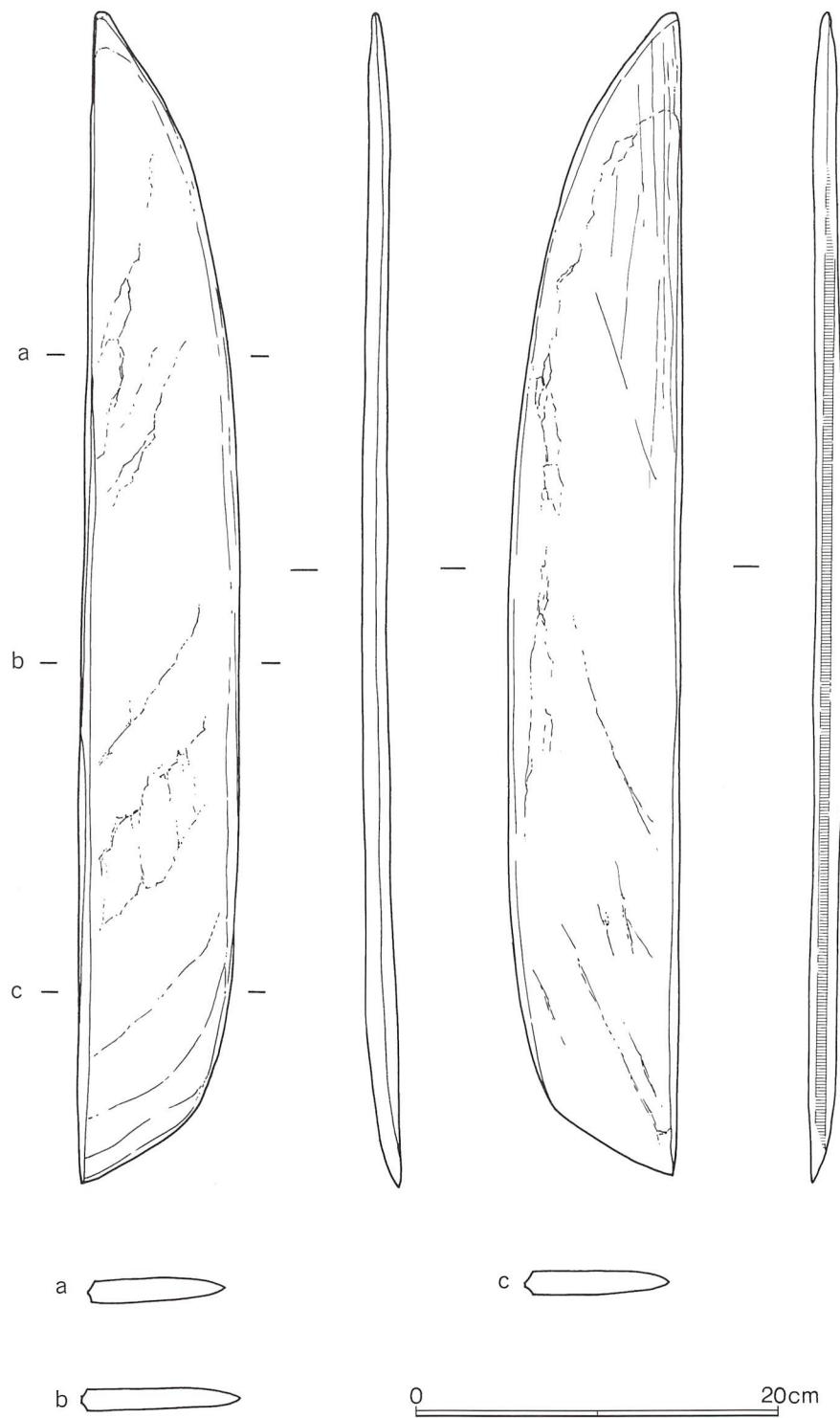
ところで、これらフルセットの「儀礼的交換用石斧」以外にも市教委収蔵品の中には3点のセットが存在するが、これが本来的なフルセットであるのかどうかは明確ではない。しかし資料カードによればそれも同一のディーラーから購入したものであり、採集地もグランド渓谷（GRAND VALLEY）のサルガグ村（SALKAGU VILLAGE）で、ダニ族によって使用されたものと記入されている。ここでは仮に上記をAセット、以下をBセットとして記載の簡略化を心がけておこう。



第2図 「儀礼的交換用石斧」(No. 1)



第3図 「儀礼的交換用石斧」(No. 2)



第4図 「儀礼的交換用石斧」(No. 3)

次にBセットの3点の石斧資料についての概略を紹介する（写真2）。

No.1は概形が長楕円形で片側が広がる石斧状を呈する例で、長さ50.3cm、幅15.5cm、厚さは最大で2.2cm、重量は2,860g。器体中央部の横断面は凸レンズ状に近い形態を示し、他の例に比べてやや厚い印象を抱かせる。片面に整形時の剥離面を僅かに残存させるが、他は非常に入念な研磨が行き届いており、河原の転石の様である。

No.2は長さ64.5cm、幅8.2cm、厚さ1.6cm、重量が1,490gの石刀状の石斧である。中央部よりやや上に黄褐色の紐、纖維を結んだスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐が一回りしている。本資料の特徴はその半月形の形態からも伺われるよう、AセットNo.2と同じく擦り切り技法によって分割されたことが明らかな点にある。中央部には分割に先だって目安として引かれたのか、小さな溝状に残る分割線らしきものが認められる。刃部相当箇所には剥離面が存在するが、これらは分割以前のものであることが研磨面との切り合いから判読可能である。従って、本資料も完成品である斧形の形態を縦方向に等分割したものであることが明らかである。

No.3は長さ66.2cm、幅15.3cm、厚さは1.4cm、重量が2,375g。長楕円形の平面形態を打ち所蔵資料中でもっとも大きな例である。表裏面に片岩特有の節理面を残存させており、若干の凹凸面が観察される。剥がれやすい節理面にクサビ状の石片を挿入してか、或いは直接敲打を加えることで母岩から剥離したのであろうか。器面は緑色の縞が見られて美しく、黄鉄鉱の結晶も見られる。非常に薄く仕上げられた例である。本例にはまず黄褐色の組み紐が巻かれ、その上に植物の纖維を巻き付けたスカート状と毛糸が結わえられた紐がそれぞれ一回りし、そこに動物の毛と毛皮片付きの紐が巻き付けられている。毛糸は赤、黒、黄色、青、ピンクの5色を認めることができる。

これら3点については1点が中型で他の2点が大型となる組成、1点が分割痕跡を明瞭に留めた石刀状の形態を有すること、オウムの羽根を貼り込んだ飾り板は見られないものの、2点には黄褐色の紐、纖維を結んだスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐などが観察されることから先のフルセットと共通点が多い。加えてこれらにもタカラガイを縫い付けたベルトが付随していることから、本来的にはフルセットとしての関係を成立させていた資料と考えて良いだろう。

石斧の産地と製作

さて、「儀礼的交換用石斧」については本多氏がその著書のなかで、使用されている石斧の石材が付近に産出しないことから交易品として流通したものであることが記されている。これは先に紹介した「ダニの居住地から150kmも離れたジェリム川で採られ……交易によって手に入れた」という記載とも合致する。Hamptonによればイリアンジャン地域には4箇所の石材産地(Yeineri, Tagime, Sela, Langda)が存在し、部族毎ではなくて言語集団を単位とした交易網が形成されていたことが指摘されている。ここで紹介したダニ族の「儀礼的交換用石斧」は、YeineriとTagimeという二つの採石場所から供給されたものであり、特にダニ族、西ダニ族にあっては二つの石器原産地のうちで前者が最も主要な産地であったらしい。本多氏も西イリアン地域に複数の石材産地の存在することを紹介したうえで、1962年にオーストラリアの登山家(H・ハーラー)がダニ族ポーターと共にイエリメ(上記Yeineriのことであろう)の石切り場を訪れ、母岩から石斧用の素材を採取するという点と、その際に火を焚いて母岩から素材を剥がしとっていたという興味深い事例を紹介している⁽⁹⁾。

この加熱処理による石材獲得についてはHamptonによる一層詳しい報告があるが、そこでは河



写真2 「儀礼的交換用石斧」のフルセット（Bセット）
(左からNo.1、No.2、No.3)



写真3 露頭面を加熱して石斧素材を得る
(Hampton 1999より)

原の巨大転石だけでなく露頭からも加熱処理によって板状の石斧素材を獲得している様子が詳しく紹介されている。河原石の場合は石の上で火を焚いて、頃合いを見計らって火をどけて人頭大のハンマーストーン（河原石：円礫）を叩きつけて石片を獲得する方法である。一方、露頭の岸壁から石材を得る方法は興味深い。まずは岩陰のようにオーバーハングした露頭下に数人の男性が地上1m程の

高さに木製の平棚を設け、その上で火を焚いて炎が岩肌にあたるようにする。30~40分程すると水などで冷却することなく岸壁から岩片が音をたてて剥がれ落ちてゆく。この剥落した石材をしばらく自然に放置して冷却した後、ハンマーストーンなどを用いて加工するのだという（写真3）。

さて、ダニ族の石器は玄武岩、角閃石片岩、粘板岩などから製作されていると述べられているが、ここで紹介した鶴ヶ島市に所蔵されていた「儀礼的交換用石斧」は黒色粘板岩製のものによって占められている。大型石斧の中にも黒色だけでなく緑色を交えた色調の石材が認められることと共に、その石斧の表面に黄鉄鉱の結晶が見られる例をHamptonも紹介しているが、これはA・B両セットの資料中にも観察されていることは先述したとおりである。「儀礼的交換用石斧」が限られた特定石材産地で製作されたことを明示していると言えよう。そしてそれは『Culture of Stone』を参照する限り、石材の色調や含まれる鉱物などからYeineriの産地であった蓋然性はたかい。

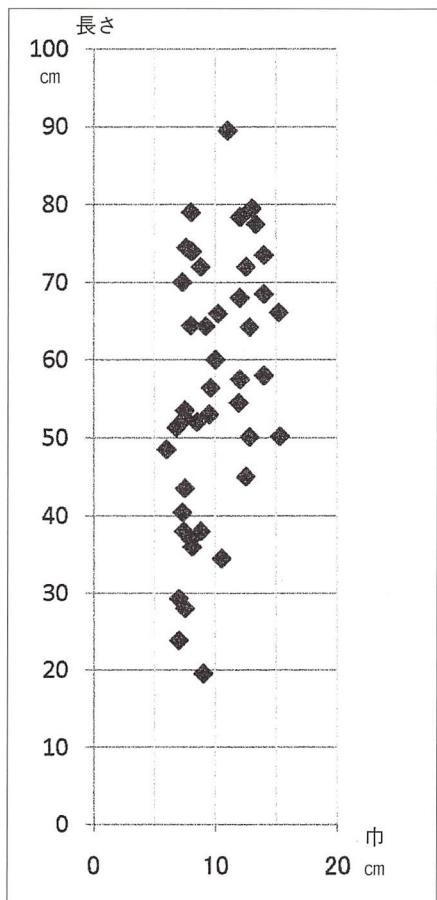
石器製作工程の詳細を復原することは今回の資料からは不可能であるが、少なくともこれらの資料を観察する限りでは、素材が河原石（転石）を加工したものとは考えられず、恐らく上記したような岸壁や露頭などの岩体の表面から直接、加熱処理によって獲得したものであったのだろう。その主たる根拠は表裏面に形態作出の為の剥離、その後の研磨によって素材時の状況を留めてはいないものの、そもそも大型であることと薄く仕上げることを目的としているこの種の石器の場合、板状に素材を剥離することが製作の大前提となっている筈である。その為には河原に点在する礫（巨礫も含め）などではなく、巨大な岩体の節理面に加撃等を加えて板状に素材を剥離するか、或いは前出のように熱処理を行って直接岩体から剥落されるのが最も適した素材獲得工程となる。長大で狭小な当該石器の属性を念頭に置くならば、裏面側に多少なりとも凹凸が生じる剥離ではなく、熱処理による獲得の方がその後の形態作出を容易に進められたに違いない。

これらの素材はハンマーストーンによる敲打により形態が作出された後、全面に及ぶ研磨作業が丁寧に進められてようやく「儀礼的交換用石斧」となる。鶴ヶ島市例に見られたようにこれらの石斧はその全面にわたって入念な研磨が施されており、素材の剥離・剥落面などを一切留めていない。この研磨作業には手持ち、或いは固定（河原等に存在する巨礫）の砥石が用いられるが、Yeineri地域には堅く良質の砥石が存在するという。通常の磨製石斧に比べて研磨面積が大きいこの研磨作業では、我々が想像する以上に多大な労力と時間を要するものであったらしい。Hamptonは現地のイ

ンフォーマントを介した話として、25-40cmクラスのものでさえ「最短で8ヶ月、長いと1年半から3年もの期間」を要し、また60cmほどの「儀礼的交換用石斧」を所有者である男性は「1年半以上の時間をかけて磨き続けたもの」と述べたという。こうした研磨作業は無論、毎日ではなく断続的なものであったと考えられが、長時間をかけて磨きあげるという時間・労力の投下は「儀礼的交換用石斧」の大きさに比例するものであることを考えると、その社会的価値（交換価値）の増大の一端をこの研磨作業が負っていたと判断することもできよう。

今回紹介した「儀礼的交換用石斧」について Hampton は「Display Exchange Stones」と称しているが、そもそもダニ族の間では Je と呼ばれている。このジェ (Je) は結婚式や葬式等と言った儀礼時の交換用に製作されるもので、少なくとも他に10種を超える呼び名があるらしい。Hampton は著書のなかで38点の計測結果を紹介しているが、そこには長さが最小で19.5cm、最大で89.5cm、幅は14cmから9cm、厚さは0.9cmから2cmまでのバラエティが認められ、それぞれ平均値は長さが56.4cm、幅が9.6cm、厚さ1.5cmである。これらの数値から判断すると鶴ヶ島例は大型の部類に属していることができよう。また鶴ヶ島例で特に注視される点は「儀礼的交換用石斧」の中に明らかな分割事例が見出された点にあり、6点中2点に明確な擦り切り技法による石斧分割例が確認されたところである。また、Hampton の著書『Culture of Stone』の中にも同様な半月形に近い分割例 (P113, Fig. 3. 9) を認めることが可能であり、この「儀礼的交換用石斧」では分割という行為が決して例外的なものではなくて、何らかの意味を有していたことを伺わせている。

ところで「儀礼的交換用石斧」については原産地での原型 (Pre-from) 形成は間違いないであろ



第5図 Jen の法量
(Hampton 1999より作成)

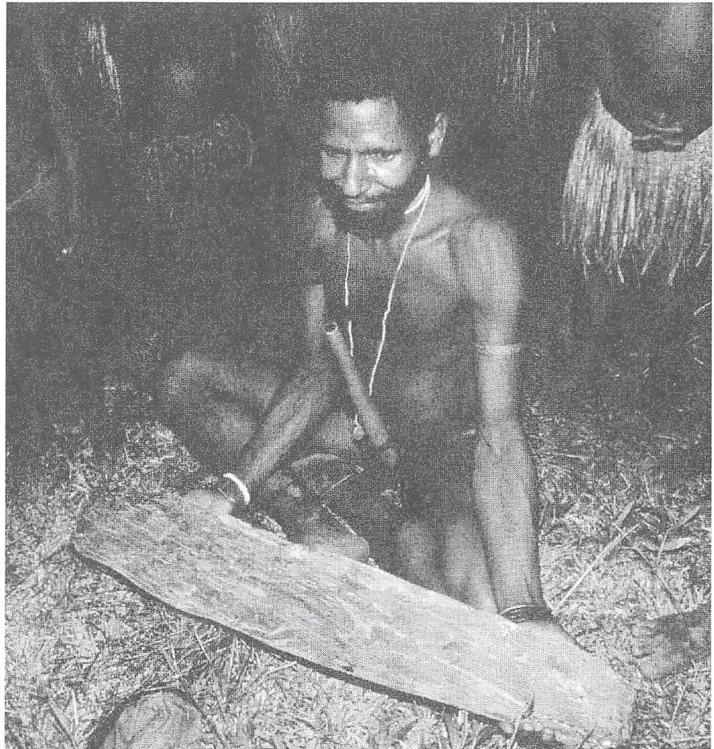


写真4 交易用の石斧素材
(Hampton 1999)

うが、数ヶ月から 1 年以上にも及ぶ研磨作業までもが全て原産地である Yeineri 等の石材原産地周辺で進められていたとは考え難い。本多氏の報告の中にもこの Yeineri に棲みそこをテリトリーとするワノ族が、石斧については完成品だけでなく未製品状態で交易品として外部へと出ていたことが記されているが、Hampton の著書でも交易用に貯蔵されているという完全に研磨作業が終わつた 7 点の石斧と 3 点の「儀礼的交換用石斧」の素材（原型）が紹介されている。この 3 点はほぼ形態的な調整が済んでいる様子であり、こうした状態で対外的な交易品として石斧が流通していたことを伺わせており、各部族や集落ではこれを入手した後に多大な時間をかけて研磨作業を進めて製品に仕上げていたのであろう。

この種の石器の価値は第 1 にその大きさにあり、大きいほどに価値は高い。また、薄さもさることながら幅が狭いことも大きな価値判断の基準とされている。大きくて幅の狭い「儀礼的交換用石斧」ほどその価値があるとみなされるのだが、その他にも素材となった石材の色調（明るい緑、暗緑色、青や黒などの色調を持つ Yeineri 産が最も好まれた）や研磨度も価値評価の要素となっており、全面に及ぶ丁寧な研磨作業（価値の付与・増大）は交換の途中で付加されていった可能性も否定できまい。或いは擦り切りによる分割も、それが原産地でなされたとはとても考えられないことから、入手した集団で何らかの意図をもって再加工（分割）されたものであったのだろう。本稿で紹介した二例の分割資料のいずれもが、分割後に形態の修正や研磨など何ら加工が施されていないことは、分割が単に長くて幅狭くすることだけが目的ではなく、1 本の石斧を 2 本にすることに何らかの社会的意味なり価値が存在したことを物語つていよう⁽¹⁰⁾。

装飾とその意味

「儀礼的交換用石斧」はそのままで披露されたり交換されたりするのではなく、個々の紹介時に記載したように或いは写真でも判別されるように装飾品が付加されている場合が多い。黄色の紐はランの茎を編んだもので、これを石器中央部からやや上半部にかけて 8～12 卷ほど互いが重ならないように巻き付けている。このランの茎製の紐は結婚式用のスカートであるジョガル (Jogal) と同じものと考えて良いのだろう。

これに対してその上にはアシの茎を平に伸ばし、それを文字通りスカートのように垂れ下げたサリー (Saliga) で覆っている。このサリーは下のジョガルが見え隠れするような位置に巻かれている点も注視されて良いだろう。前者のジョガルが wedding skirt を、一方、後者のサリーは drop skirt をそれぞれ表すものとされている。これらミニチュアスカートはある意味で女性表現のモチーフと言えようが、しかしダニの人々への聞き取りからは「儀礼的交換用石斧」には男性や女性などの性差はなく、ただの石なのであるという。

さらにこの鶴ヶ島市の資料にはこれら二つのスカートの上に、各種動物の毛皮片（報告によればそれは木ネズミや豚、袋ネズミ、木カンガルーなどとされている）、オウムなどの鳥の羽、更には恐らく交易で入手したり旅行者などが持ち込んだであろう毛糸片などを付けた植物纖維で編んだ紐が巻かれている。他の事例ではこの上に豚の尾や、Cocoons (ミノムシの一種?)、湾曲した見事なイノシシの牙が複数装着される場合など多様であった。本例で特に看過できない点は何れの資料にもオウムの羽根を貼り込んだ飾り板が差し込まれていることがある⁽¹¹⁾。このオウムの羽根付きの飾り板が差し込まれた部位は、『ニューギニア 神と精霊のかたち』に掲載された写真では No. 1 が石斧

本体とジョガルとの間、No.2・3がジョガルとサリーの間というように違った部位に差し込まれているが、どちらが本来的な姿なのか(採集後に外れてしまい正確な部位に戻されずに収蔵されたのか)、或いは何れの部位でも構わないのか、など類例が見られなかっただけに断定できず残念である。この飾り板はその形態と羽根の配色からインコを表現していると考えて良いだろう。

「儀礼的交換用石斧」自体に見られる装飾は以上のとおりであるが、しかし、当該資料はこれに加えてセットを括る帶1点とそれを収納する網袋が2点存在する。この帶は一般的にJeraktoと呼ばれるもので、長さ約340cm、幅4cmで両端には毛皮片2片が縫い付けられており、帶自身にも大凡70cm間隔で毛皮片が縫い付けられているのが観察される。この帶で注目されるのは帶の中心軸に沿って殻頂部が除去されたタカラガイが2cm間隔で編み込まれている点であり、総計で81点を数える。タカラガイは白色や乳白色のもので、光沢が美しい。因みにこれら81点の貝を計測したところ平均して長さが2.02cm、幅が1.52cmであった。この帶は植物纖維を編んだものであることは確かであるが、それが何であるかは不明である。タカラガイが編み込まれた間には横方向に赤い顔料が塗られている。また、帶の両端には白い粒貝のようなものが見られるが、これはイネ科の数珠玉である。秋に実がなり、数珠のようにして遊ばれることからこの名前があるが、これは東南アジア原産であることからいつの段階かにニューギニアにも伝播したのであろう。この数珠玉の長軸方向に穴を開けたうえで紐を通している。タカラガイと同様に美しく白い光沢が見られる。

この帶はBセットにも付随しており、それにもタカラガイが縫い付けられている。長さは約270cm、幅4cmで端部に毛皮とCocoons⁽¹²⁾と呼ばれる昆虫の巣が縫い付けられている。本来は両端に存在したのであろうが、現在は片側にしか見られない。帶の中途にも毛皮が縫い付けられていたと考えられるが、その痕跡は1箇所にのみ残るだけで不明であるが、本来はAセットの帶と同じく一定の間隔を置いて存在していたのであろう。本例にもタカラガイがその中心軸に沿って縫い付けられている。総数は102点と帶の長さを勘案すると数が多いが、これは間隔をあまり空けずに編み込まれた結果である。タカラガイ102点の平均値は長さが1.92cm、幅が1.41cmとAセットのものと比べるとやや小型であり、しかも粒がそろっていない印象を与えている。両端部の数珠玉の装飾は見られない。また、タカラガイとタカラガイとの間には赤彩ではなく植物の茎(恐らくジョガルと同じランの茎)が編み込まれてアクセントを与えている。

次にフルセットとなった「儀礼的交換用石斧」を入れる網袋であるが、これは鶴ヶ島報告ではノックエンとされていることは前述したとおりである。同じ網袋については本多氏の『ニューギニア高地人』にもしばしば登場するが、本多氏はこれをオンボとして紹介している。このオンボは同書の写真から判断すると首や額に紐をかけて背負うもの(P:56-57、77、180)と帽子のように頭に被るもの(16、77、96、125、201)、そして両者を兼ね備えたもの(56、106、192、192)の三種が見受けられる。これらが明確に使用方法を異にするか否か断言はできないが、同じ植物纖維で製作した網を多用しているとの理解が妥当であろう。

改めて本網袋を眺めてみると、網自体は二重となっており、袋とすると当然ある筈の口が見あたらない。本多氏の著書(P106)に掲載された写真がこの網袋の使用方法を良く表していると考えられ、そこには袋の中にモノが収納されている様子が伺われることから何らかの収納方法があったと考えられる。二つの長方形状の網の片側は三角形状のフード形を呈しており、これをを利用して荷物を入れた網を頭に被るようにして運搬していた可能性は高い。この網袋について本多氏はクワ科の



写真5 オウムの羽根の飾板



写真6 網袋 (1)

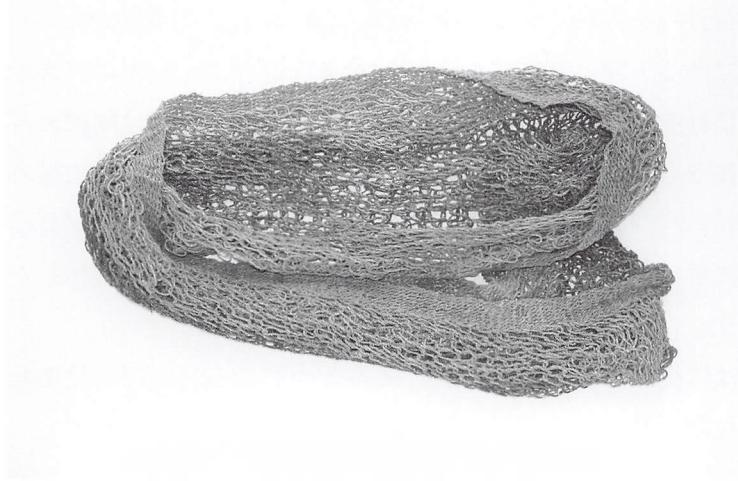


写真7 網袋 (2)

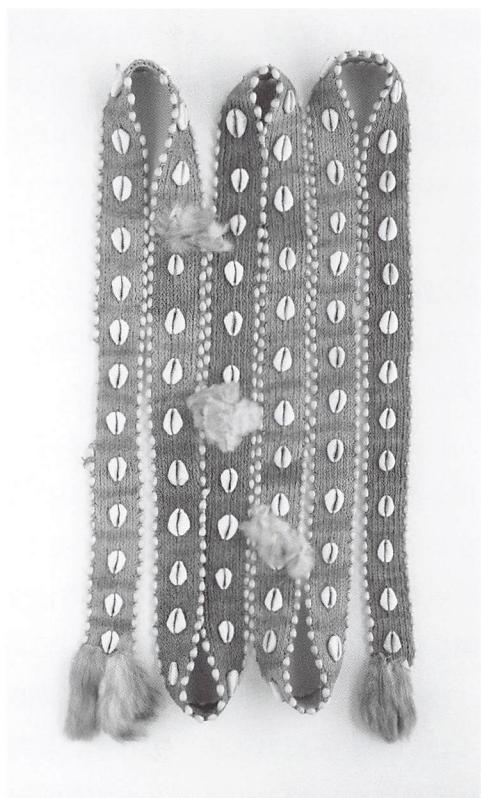


写真8 シェル・バンド

木の皮の纖維で作った紐を編んで作られていることを紹介しており、加えてその編み方についても図示されている。当該資料もまったく同じ編み方で製作されている事が確認された。

「儀礼的交換用石斧」3点と共にセット関係を成立させている網袋は2点存在する。これがどのように使用されたのか、つまり二つの網があるからには二度包むという行為がなされたのか否か、現状では不明と言わざるを得ない。1) 石斧を網に入れてタカラガイを編み込んだ帶で縛ったうえで更に網で包む、2) 石斧をタカラガイ付きの帶で縛り、網袋で二重に包む、などと言った方法も考えられるが、「儀礼的交換用石斧」、タカラガイを縫い付けた帶、そして網の3点がセットとして始めて交換価値を有していた可能性も否定できない。

「儀礼的交換用石斧」の社会的価値

「儀礼的交換用石斧」は Je 以外にも Jao、Sie、Siengga などと言った幾つかの違った名前があるが、それらが一様に婚姻や葬儀などの公共儀礼や交易、交換の際に使用された財であった点は疑いの余地がない。当該石器の基本文献である『Culture of Stone』のなかで Hampton は、これらの石器がまた豚などを購入する際の通貨として長らく使用されていたことを紹介し、大凡「大型の石器＝大きな豚、中型の石器＝中型の豚、小型の石器＝小型の豚」という価値の対応関係を指摘している。ただし、その価値は既に若干指摘したように大きさだけでなかった点は興味深い。

大きさに加えてその色調、淡緑色とか光沢とかも価値を推し量る要素であったが、何よりも大きな点はそれがどこから選ばれたものか、その出所や来歴などが大きく関わっていたことは間違いない。例えば或る部族によって保管されていた「Gutelus Stone」という名の石斧は、その長さが121cmもある長大なもので、そこには祖先の靈や超自然の力が宿っており畏敬の対象として聖なる家に保管されていた。大きさだけでなくその色調や光沢來歴、由緒のある交換用石斧は特別に名前が付けられ、一般の人々の目に触れない特別な場所に保管されていたことが通例であったらしい。今回紹介したフルセットの3点も村人は普段目にするとはなかった資料であったが、中には聖なる石として男性の監視下にある「聖なる家」で管理されていたということから、もはや大きく美しく、由緒のある石斧は、財ではなく目に見えない靈や超自然の力を持った畏敬、或いは恐れ多い存在にまで昇華していたと考えることができる。

Hampton も著書の中でこの Je が神聖なものとして、人々の畏敬の対象となっており普段、人々の目に触れることがなかったと述べている。彼はインフォーマントを通じて何度も Je の性別や役割、意味、装飾について聞き出そうとするが、彼らは首を振るばかりで何も答えなかつたという⁽¹³⁾。

こうした事例を確認してゆくと、マリノフスキイによる名著『西太平洋の遠洋航海者』で記された内容との類似性に気付く。マリノフスキイはクラ交換でやり取りされる「第一級の腕輪と耳飾りは、どれも固有の名前とそれ自体の歴史を持っており」、それは傍目には「数個のきたならしい、油ぎた、みすぼらしい……装身具」でしかない。しかし彼らには「伝統や慣習の社会的力によって意味を与えられており」、彼らが財宝と判断するヴァイグアを所有することは「うれしいこと、心の安まること、ほっとすること」で、眺めたり触ったりするだけでそこにある様々な力が伝わる、つまり彼らにとっては至上の喜びを得ることができるのである。それは生者のみならず死者でも同様であり「ヴァイグアは、靈に与えられる最も効果的な供物」とされている。その為に死者は親族が持ち寄ったヴァイグアや貴重品で取り囲まれる。それは「ヴァイグアは最高の安息であって、人の

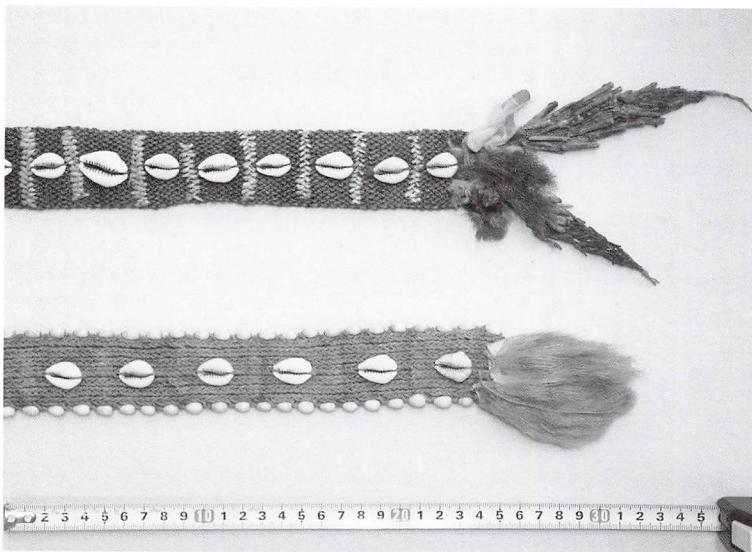


写真9 シェル・ベルト端部の飾り



写真10 ジョガルとサリー

最も忌むべき瞬間でさえ、ヴァイグアで取り囲むと……悪の度合いがうすまる」と認識されているからである。次いでながら有名な部族間に広範に行われる交換形式としてのクラ交換（常に時計回りに移動するソウラヴァと呼ばれる赤色の貝の首飾りと、その逆に回るムワリと呼ばれる白い腕輪の交換）は、様々な交換形態や物資を重層的に含んでいるが、その中にはドガという湾曲したイノシシの牙と共に、ベクと呼ばれる巨大であるが非常に薄く研磨された石斧が流通していた。このベクは勿論実用品ではなく「富のしるしとして、また誇示の品としての機能を果たす」ものであったと記されているが、これは儀礼的交換用石斧と同様なものと考えてよいのかも知れない。

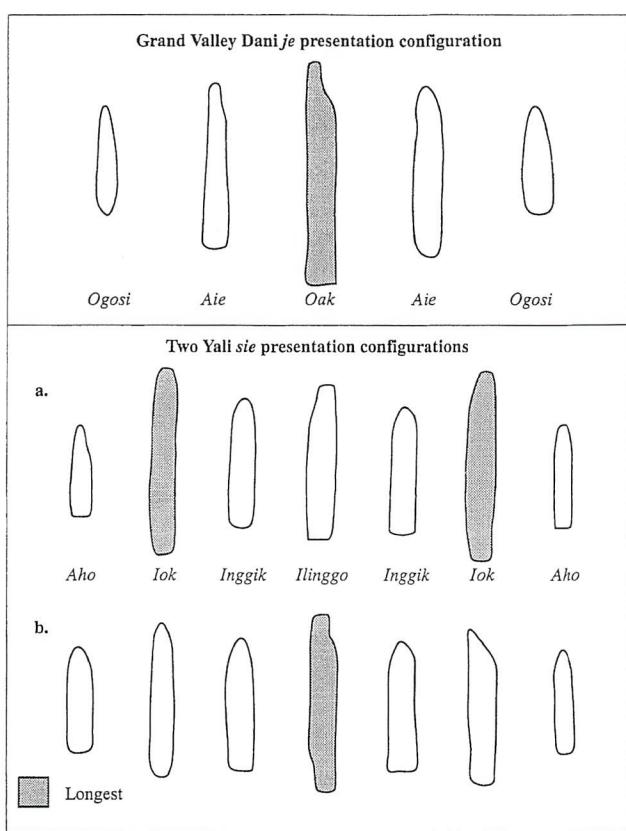
さて「儀礼的交換用石斧」がダニ族社会において普遍的な価値を有していたことは理解されてきたが、最も興味深い点はそれが結婚式や交易の場だけでなく葬式においても利用されていたという点である。しかし、これは石斧が有する価値からすれば当然のことであったようだ。例えば、或る人物の葬儀に際して村人が数匹の豚を持参した場合にはそれに見合う1～2個の交換用石斧を受け取るのが通例であったらしい。葬儀の間は、こうした一種の香典返しとも言い得る「儀礼的交換用石斧」は、女性用のスカートを模した装飾等が施されたうえで3点から7点が儀式用の網袋の上に並べられ、その上にタカラガイの付いた豪華なベルト（シェルベルト）が乗せられていた。こうしたフルセットの包みは下に草やバナナの葉を敷いた上に注意深く且つうやうやしく置かれていたという。こうした情景が本稿で紹介したフルセットの本来の姿であったものと推察されるのである。

ダニ族の社会は明らかな階層社会であり、その財力（豚の数）に対応するように妻の数も多い⁽¹⁴⁾。東部ダニ族のなかには一人で40～50人の妻を持つ実力者もいたらしい。そのような人物はBig Manと呼ばれ、集落内だけでなく周辺の村を含めた広範な人々からの人望を得ていた人物である。こうしたBig Manの葬儀に関する記録が残されているが、その際には400点もの「儀礼的交換用石斧」が並べられたと言う。葬儀の際の石斧を含むセットの数は、無くなつた人物の社会的な地位によって異なり、1つの場合やゼロの場合もある一方で、このような数百本にも及ぶ膨大な石斧が展示される場合もあった。当然の帰結として葬儀では当事者の側から豚を持参した者には石斧を、石斧を持参した者には豚をというような返礼の義務が生じる訳であり、財力の裏付けがない限りは石

斧の展示もあり得なかつたに違ひない⁽¹⁵⁾。

さて、「儀礼的交換用石斧」のもう一つの重要な役割として忘れてならないのが、それが戦争時の賠償に充てられたということである。特に戦争では多数の Je の支払いがなくては收拾がつかなかつた、とさえ言われている。考えてみれば戦争は様々な社会的儀礼を伴わざるを得ないものであることを知る。豚や女性を巡る村落単位の戦争では必ず勝者と敗者とに分けられる。勝者は儀式を執り行って勝利を祝う一方で、敗者は戦死者の為の葬儀が行われる。後者の葬儀では上記したように豚や「儀礼的交換用石斧」が提供されるのは無論のこと、前者の勝利の側にあっても祝宴では豚の消費や「儀礼的交換用石斧」が、後者でもその葬儀に豚と「儀礼的交換用石斧」が必要とされる。こうした村内での儀礼的な財の消費に加えて、村単位の財の移転も存在した訳であり、本多氏の著書の中では豚1頭が盗まれた代償として「タカラガイ12個と塩包み2個」が村落間で遣り取りされたことが紹介されている。交易以外にもこうした戦争の代償として村落間で「儀礼的交換用石斧」の移転が行われていた事実は極めて興味深いと言えよう⁽¹⁶⁾。

ダニ族を始めとしたニューギニア高地人の間では男女間の分業が明確であり、特に男性の仕事は戦争や交易、そして威信獲得（資産・財産の形成）に多くの時間が割かれることとなっていた。生活の基本とも言える食糧生産では女性労働に大きく依拠した社会構造下では、男性の主な活動が集団内外での威信獲得活動へと傾斜してゆくことは必然であったのかも知れない。そもそも一夫多妻という婚姻システムも、豚を始めとしたタカラガイやここで扱った「儀礼的交換用石斧」の蓄財と深く関係したものであったと看做すことが可能であろう。女性を多く娶ることは社会的財産である豚を増やすことの大切な用件であり、豚が増えれば他を蓄財する道が開けてくるに違ひないし、更



第6図 石斧の配置と名称
(Hampton 1999)



写真11 Gutelm 村で最も強大な精霊が宿る *je*
(Hampton 1999)

に多数の女性を娶ることにも通じてゆくというスパイク的な連動が見えてくる。ダニ族の社会では人生の様々な場面を通じて財のやり取りが行われているが、最後にその象徴的な財の遣り取り—男性・女性それぞれの親族間で財の贈与—を以下に紹介しておきたい。豚と共に本論で紹介した「儀礼的交換用石斧」が等価の価値を持つことが明らかであると同時に、通過儀礼を含めた様々な儀式に於いて財の交換が親族間でさえも頻繁に行われていたことが伺い知れる。こうした財の贈与・交換関係を通じて親族集団が強固な結び付きを保持し続けていたのであろう。

	花婿の親族	花嫁の親族
結 婚	ブタ 4頭	経済的援助
祝 宴	ジェ 6個+シェルバンド	ブタ 3頭他
子供の誕生	ブタ 1頭	ジェ+シェルバンド
息子の通過儀礼	ブタ 2頭	ジェ+シェルバンド
娘の結婚	ブタ 2頭	ジェ+シェルバンド
子供の死	——	ジェ+シェルバンド

(Brian Schwimmer 1997 「Dani Marriage Patterns」より一部改変)

第1表 ジェ（「儀礼的交換用石斧」）の贈与機会とその価値

終わりに

鶴ヶ島市教育委員会に所蔵されていた「儀礼的交換用石斧」のフルセットについて、長々とした説明を行ってきた。はじめに書いたように著者の関心は大型石斧製作の技術的な特徴と機能にあつたが、意外にも調べはじめるとその社会的機能等々に関する派生事項について実に興味深いものがあり、とても衝動的に始めた浅はかな勉強で太刀打ちできる対象ではないことを痛感した。とりわけ興味深かったのが、当該石器が財貨としてだけでなく威信財として明確な社会的機能を有していたことであり、本稿の執筆に併せてマリノフスキイの名著「西太平洋の遠洋航海者」を改めて熟読する機会も得ることができた。威信獲得という社会的側面が経済活動をも包括している未開社会への理解が、考古学研究に必須であることを再認識することができたことは大きな成果であった。威信財そのものしか残っていない考古学研究において、威信財に対する人々の意識やその社会的機能が記録化されている民族資料は極めて貴重なものと言えよう。僅かに数点の資料であったが、資料移管前に自らの目で十分に観察する機会があったことは幸運であったと思う。移管前の慌ただしい時期に資料観察の為の借用、観察、分析の機会を許可くださった鶴ヶ島市教育委員会の斎藤 稔氏、並びに天理参考館の吉田裕彦氏に改めてお礼申し上げたい。

また他の原稿執筆との兼ね合いのなかで、年末の慌ただしい期間内で撮影、実測から本文の執筆まで一気に仕上げてしまったが、対象資料の重要性を鑑みれば稚拙な内容であることは否めず、機

会を改めて、再度、本資料を取り上げて検討してみたいと考えている。その折りには是非、著者が興味を抱いている縄文時代の前期以後に出現する巨大化した威信財との比較研究を視野に入れた研究を行ってみたいと考えている。儀礼や威信などといったキーワード一辺倒で説明されることの多い考古遺物について、何らかの解決の糸口を与えてくれる可能性があると期待している。

最後に当該資料の分析に関する基本文献である『Culture of Stone : Sacred and Profane Uses of Stone among the Dani』1999年 O. W. "Bud" Hampton については、国内に在庫がなく本の入手に時間を要してしまったことから、ネット上で事前にその内容をブックレビューにてチェックしたもの、内容の詳細を知るには到底及ばなかった。原本が手元に届いたのは原稿執筆も終了した校正段階であり、一応はその内容に目を通したものとの内容に関する十分な理解に至っていない点を白状せざるを得ない。しかしながら執筆段階にて Je の性格やその役割、機能などについては同書の他にも幾つかのネット検索で確認をとることが可能であり、特に Pete Bostrom Collection のギャラリーページではここで紹介したフルセットと全く同一な装飾を持つ「儀礼的交換用石斧」が多数紹介（販売）されており、そこでは随所で Hampton の著書からの引用や概要紹介がなされており、大変に参考になった。またネット上の検索で見つけた Brian Schwimmer による「Dani Economic Organization」、「Dani Marriage Patterns」は、Je が社会内で財貨として活発な動きと機能を負っていることを見事に描き出しており、これも本文執筆に際して多いに役立ったことを付記しておきたい。（2009.12.18脱稿、2010.02.18校了）

《註》

- (1) 今泉氏は石内村（塩沢町）に生まれ、その後も地元の役場に勤務されていた。その後に埼玉県朝霞に転居されて養鶏業を営んでいたが、故郷の石内村と塩沢村の合併問題が浮上し請われてその大役を引き受けたという。律儀な人柄に加えて調整能力にも秀でた方だったとの記録がある。美術品収集のきっかけとして伝えられている話として、ビルマの政治家バー・モーとの出会いがあった。バー・モーはインドから独立したビルマの初代首相であり、太平洋戦争終了後に対日協力政権の首席であった彼は日本に亡命をする。約1年の亡命期間中、彼は新潟県塩沢町の寺に滞在してGHQの追求を逃れていたが、この時にバー・モーを匿ったのが他ならぬ今泉氏であった。今泉氏は世界的にも屈指の宝石産地であるビルマからバー・モーが持ち込んだ数々の装身具や宝石を目の当たりにして深く感動したという。
- (2) 大橋氏が多大な努力を払って収集した資料もさることながら、今泉氏の意向を汲んでからの収集はより系統的、学問的な方向へとシフトしていくものと考えられる。博物館における収蔵・展示という目標を据えたことにより、以後の収集は明確な方向性を得ていったことが明らかである。大橋氏はロンドンやニューヨークのサザビーズやクリスティーズなどの国際的なものからオセアニアのローカルなオークションに至るまで、殆どのカタログに眼を通して資料収集に当たられたことを述懐されている（大橋2005）。
- (3) 世界第二の島であるニューギニア島は本州島の3.4倍、約77万平方キロメートルの面積を有する。人口は周辺の島嶼部も含めても約650万人程であるが、使用されている言語は1,000近くにも及ぶとされている。言語学者によれば一つの言語の話者数が数百人程度の例も珍しくなく、そうした例は平地部に多くて自然環境が厳しい高地の方が1言語あたりの話者数が多いという。
- (4) 低地や平地に住む人々との最大の相違は生業にあると言えよう。低地の集落に暮らす人々とはサゴヤシから得たデンプンが主食となる。サゴヤシの木を切り倒し、その幹部分に含まれるデンプンを取り出す為に纖維が細くなるまで幹を敲いてつぶす。そこに水を加えて溶け出したデンプンを網で漉して容器に入れ、しばらくしてデンプンを沈殿させ、そのデンプンを焼いたり熱湯で溶かして食べる。サゴヤシの他にタロイモやヤムイモ、バナナなども食する。

平地ではヤムイモやタロイモが主食となるが、特にこの地域ではヤムイモが社会的な儀礼・交換などと結びつくことから重要なものとされている。ヤムイモを主食とする地域では収穫時にはヤムイモを村の中央広場に展示して、周囲の村々から人々を招待する。イモは美しく積み上げられ、或るものには装飾を施して見栄えを争う。このヤムイモは招待した他村の男性に贈与というかたちで贈られるが、別の機会には逆に彼から収穫儀礼の誘いを受け、今度はイモをもらう番となる。彼らの最大の関心事は、大きくて長いヤムイモの収穫を村内外に知らしめ、彼らから評価されることにより名声と威信を獲得することにある。豊田氏によって紹介されている東セピック州の事例（食料の交換も贈与という形態をまとっている事実）は、有名なマリノフスキーの報告と全く同一であり興味深い事例と言えよう（豊田2005）。

またこうした人々の威信獲得について、大橋氏も興味深い指摘をされている。氏によればニューギニアに棲む人々は自己主張が強く、常に自らの威信を高めることを考えているという。食料だけでなく木彫りの仮面や精霊などの製作も「個人の威信を高める為の手段」であり、村人に賞賛され感動を与える作品を作る為に、男性達は日夜努力しているのだという（大橋2005）。未開社会に於けるたゆまない威信獲得の姿は、縄文時代に限らず先史社会研究に際して多くの示唆を与えてくれるに違いない。

- (5) ニューギニアの内陸部では塩は貴重な交易品であった。ダニ族が棲む中部高地ケマブー川流域のホメヨには塩泉があり塩造りが古くからされてきたらしい。塩泉のわき出る場所を囲って池を作り、その中に植物の葉や茎を浸して塩水を浸透させる。1日後にはそれを取り出して燃やして灰にした後、その灰を集めて穴に入れて突き詰めて塩灰を作り木の葉で包んだ包みに仕上げる。この塩灰の包み約5kgで豚1頭と交換されたという。この塩灰は石器やタカラガイ、などと並んで中部高地に棲む人々の貴重な交易品であったことが知られている。
- (6) ニューギニア島における世界遺産登録として1999年のロレンツ国立公園（自然遺産）に続き、初期農耕の遺跡であるクック遺跡が登録されたことは意外と思われる人も多いに違いない。2008年に世界遺産登録（登録名称「クックの初期農業遺跡」）されたこの遺跡は、7000年以上も遡る農業遺跡（タロイモやヤムイモ、バナナの栽培に関わる灌漑用遺構や各種石器類）としての価値が認められたもので、1970年以後にフリンダーズ大学のティム・デナム（Tim Denham）の継続的調査によってその全貌が明らかとされた。我が国では以下の文献で比較的早い段階で、ニューギニアに初期農耕文化の存在したことを知った研究者も多いに違いない。

マーク・ハドソン1997年「パプアニューギニアクック遺跡」『考古学研究』第44-3（通巻175号）

- (7) タカラガイが貨幣としての社会的扱いを受けるのは世界共通であるが、ダニ族の間では特にそうした傾向が顕著であった。本多氏の報告には興味深い事実が述べられている。ダニ族の間ではタカラガイの価値はその種類や大きさではなく、むしろ古さや美しさが基準となっており古く光沢のある年代モノこそが価値の高いものとみなされ、それを基準として①から⑦までの等級に区分されている。最も価値の高い①インドは4個で豚1頭、②のインドラグパでは5個、③のホンドでは10個でようやく豚1頭の価値があると判断されるという。これら価値の高いインドやインドラクパなどのタカラガイは、父親が亡くなった時に真っ先に長男に相続される財産でもあったという。
- (8) このような儀礼的交換用石斧に見られる異なった二つのスタイルのスカート、①ランの茎を編んで石に短く巻いた結婚用のスカート（Jogal）と②アシの茎を平に伸ばした（通常若い女性によって編まれた）（Sali）はそれぞれ、日常的に女性が被服していたものであった。本多氏の著書にもそれぞれの写真が掲載されている（Jogal: p192、Sali: p91）。本論の交換用の石斧に付随したものと比べてみるとおもしろい。
- (9) №1の石器表面には階段状剥離に近い未磨製箇所が存在するが、これは加熱による剥離面というより熱処理や被熱によるそれに類似している。加熱による通常の凹面形成とは考えられず、また石器表面も僅かに変色している印象がある。当該大型石斧製作に於ける熱加工処理については、今後の検討課題したい。
- (10) このように財を分割する事例は、縄文時代の硬玉・琥珀製の大珠にも確認されている（栗島2007）。当時において最も高位に位置づけられている威信財を分割する社会的意義については不明な部分が多いものの、そうした行為が硬玉や琥珀の原産地から離れた地域においてのみ顕在化している事実は見逃せない。物理的には分割するという行為により威信財は半分となるが、社会的にはそれは価値を二分することとなり、二つの集団が等しく価値を共有することにつながる。原産地から離れて威信財の価値が増大することで、財を渴望する集落・集団が互いの親和的関係を構築したり確認する場合にこうした財の分割が行われた可能性がある。大型石斧の

場合はどのような可能性が考えられるのか、興味深い課題と言えよう。

- (11) 飾り板（仮称）には色とりどりのオウムの羽根が貼り付けられている。この板は長さが20cm、幅が4cm、厚さが0.7cm程のもので舟形に近い形状を持ち、その一端が先鋒に作られてスカート部分への差し込み部位となっている。恐らくオウムの形態を模倣した骨格であったのだろう。色とりどりの羽根の配置をみると3点共に差し込み部側から順次、赤、紺（黒も混じる）、赤、緑、黄色、紺、緑+黄色という共通した配列に仕上げられている。インコの羽根を1羽分使用するという報告と、木製の骨格がインコに類似していることから図鑑で検索すると、ニューギニアに生息するインコのうち頭部から同じ配色の羽根を持つインコのいることを知った。オナガパプAINCO (*Charmosyna papou*) とコウゴウインコ (*Charmosyna josefinae*) である。この飾り板としたものは、恐らくその形態だけでなく羽根の色の配置から判断してもインコを表示していると考えるべきであろう。

詳細には触れていないものの、Hamptonは各種のスカートは女性表現であり、こうしたオウムの羽や毛皮、豚の牙や尾などは男性を表現すると紹介している。だが、そうした各種の品々によって飾られた「展示交換用石斧」はいずれの性別をも示すことはないらしい。

- (12) 昆虫が作った繭を意味するものであろうが、感覚的にはミノムシの繭に類似している。この cocoons を彼らは死者や祖先の精霊を示すものとして位置づけており、他の品物にも縫い付けられている場合がある。ネットで検索したところ下記のアドレスに同様な物を見つけることができた。Bセットのシェル・ベルトに縫い付けられてものは、全くの自然の昆虫の繭であった。

<http://www.qm.qld.gov.au/inquiry/factsheets/case-moths-20080709.pdf>

- (13) これらのセットの保管状況については不明であるが、葬式などの時には Big Man がそれらを恭しく並べるが、そこでは新鮮なバナナの葉などの上に網をたたんで Je を置き、その上にタカラガイを縫い込んだ帶を乗せるらしい。フルセットの写真は石斧の上に帶が乗せられるのが本来の姿であるのかも知れない。

また、注目されるのは衆目に触れる場合にはセットの配置も明確となっており、しかもその個々に対して名称が与えられていたということである。その場合に最も重要な判断基準となったのは大きさ（長さ）であったらしく、その大きさに従って与えられた名称は展示される時の位置関係を示すものでもあった。結婚を控えての支払いなどの場合は3点の石斧を含むセット（石斧、網、帶）が一般的であるが、Big Man の葬式などに際しては5点の石斧がセットとなる場合もあったという。そのような数の違いを超えて、展示される時には最も長い石斧を中心や両側に配置するというルールが存在した（第6図参照）。

- (14) ダニ族間での結婚費用（男性が女性の親族へ支払う代価：婚資）は1970年代には高騰し、若者達がもはや結婚できないとする訴えを裁判所に起こすという事態にまで至ったという。裁判官が下した最終判断は以下の通りの興味深いものであった（Marcus1978）。

- 1 新たに結婚する場合には、5頭の豚、一羽のヒクイドリ、300オーストラリアドル。
- 2 既に一度結婚したことのある場合、その価値は下がり、豚2頭、一羽のヒクイドリ、37.5オーストラリアドル。
- 3 もし女性が数度の結婚を経験していれば、特に何かを支払う価値はない。

1970年代に至っても婚資として豚が通用していたことと共に、現金であるオーストラリアドルでの支払いも併記されている点は変動する社会の移行を示しており興味深い。

Rebecca B. Marcus 1978 『Survivors of the stone age —nine primitive tribes today—』 New York

- (15) 確かに豚は彼らダニ族の唯一無二の財産であり、交易や婚資においてなどとして普遍的な価値を有するものである。しかし、時を選ばない葬儀などの場合に提供（贈与）すべき豚が妊娠中であったり、病気であったり、まだ子供であったりすることもあったであろう。これに対して「儀礼的交換用石斧」は無機物であるが故に時も場所も選ばない、即ち有機物としての豚に対して無機物の「儀礼的交換用石斧」は価値ある状態を留め置くことが可能という特質が指摘できるのである。豚だけなくこうした非実用的な無機質である大型石斧を価値体系の中に組み込んだところにダニ族の知恵を見る思いがする。

- (16) 本多氏の著書P117には、高地人の交易ルート並びに交易品が明記されており、極めて興味深い内容を読み取ることができる。本多氏達が滞在したダニ族の村（ウギンバ）の特産品としては網袋（オンボ）があり、豚や

タバコなどと共にその網袋を他村との交易品として提示する一方で、石器類や塩、タカラガイを他から入手している。彼らは入手した塩を同じダニ族の他村との取引で商品として使用する、言わば中継ぎ的な交易を行っている事実が浮かび上がってくるのである。或いは150kmもの遠距離地に産する石材を用いて製作されている「儀礼的交換用石斧」なども、ダニ族の村落間で特定の集落・集團が入手の主導権を握り、他村への分配に際して有利なレートを設定していた可能性も考えられる。

《引用参考文献》

- 石川栄吉編 1978 『民族の世界史14 一オセアニア世界の伝統と変貌一』(株)山川出版

印東 道子 2002 『オセアニア 一暮らしの考古学一』 朝日新聞社

大塚柳太郎 2005 「生活史からみるニューギニア」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』(株)里文出版

大橋 昭夫 2005 「現代文明への警鐘 一鶴ヶ島市「オセアニア・コレクションの意義」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』(株)里文出版

栗島 義明 2007 「硬玉製大珠の社会的意義 一威信財としての再評価一」『縄紋時代の社会考古学』同成社

鶴ヶ島市教育委員会編 2000 『ニューギニア 神と精霊のかたち』(株)里文出版

鶴ヶ島市教育委員会編 2005 『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』(株)里文出版

豊田由貴夫 2005 「セピック川流域の住民と造形美術品」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』(株)里文出版

福本 繁樹 1994 『精霊と土と炎 一南太平洋の土器一』 東京美術

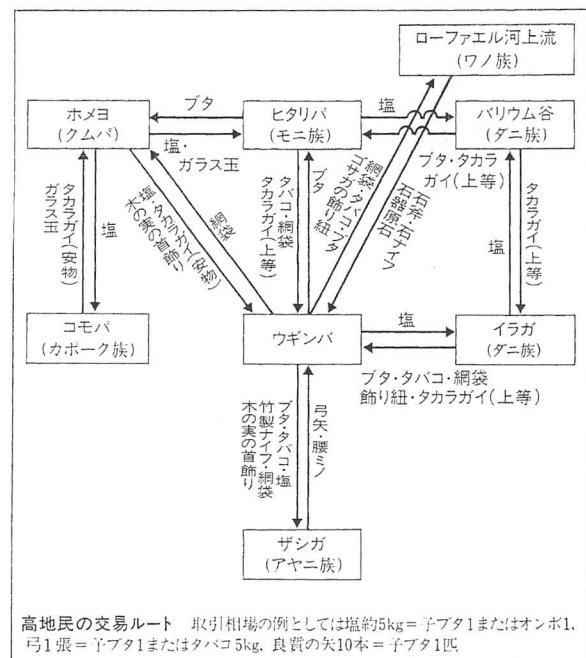
本多 勝一 1981 『ニューギニア高地人』 朝日新聞社

マリノフスキイ 1967 「西太平洋の遠洋航海者」寺田和夫・増田義郎訳『世界の名著』中央公論社

O.W. Hampton 1999 『Culture of Stone』 Sacred and Profane Uses of Stone among the Dani』 Texas University Press

《参考とした主なホームページ》

<http://www.lithiccastinglab.com/gallery-pages/2004februaryjestonespage1.htm>



交換ルート（本多1981による）